

津田昇平教話 第十九話

令和三年一月十九日 朝の教話

信心のはじめを忘れなよ。

おはようございます。令和三年一月十九日の朝をお迎えさせて頂きました。

教祖様は、信心しておかげを頂けるということを多くの方に教えて下さり、また信心の稽古けいこをつけて下さって、多くの弟子をお育て下さり、それがまた、全国、世界に散らばって、今の金光教が出来上がったわけですけれども、教祖様の信心を少しでも拝見すると、大切になさっているところがあるわけです。

大切になさっているところは、数えればきりが無いと言えましょうなんですけれども、一つの捉え方とらとして、教祖様はご自身も含めた、信心のはじめというものを大事になさっておられたと思います。

信心のはじめを忘れなよ。

一理 I 島村八太郎 しまむらはちたろう 三〇一

というご理解がありますね。短い言葉ではあるんですけど、でも、とても大切なと思うんです。信心のはじめを忘れなよ。

「信心のはじめを忘れな」というのは、どういうことですかね。信心のはじめ。多くの場合は、本当の意味で神様と出会い、神様におすが継りして、信心しておかげを頂くというのが、どこかきっかけがあると思うんですよね。

苦しんでいる中でお手引きされたとか。さまよっている中で、ホームページに出会って、そこからお参りをさせて頂いたとか。御道にはおみちご縁は頂いていたけれど、でもなかなか本当に神様に出会うきっかけがないままに、何となくは知ってはいたけれど、でも本当の意味で神様と出会い、信心の道を歩ませて頂くことができるようになったのは、どこかやっぱり本人の中でも、転機があったらろうと思っただけですね。

じゃあ、その信心のはじめというのは、皆どこか、自分自身が行き詰まったり、苦しかったり辛かったりっていうところを、神様にお絶りをすることでおかげを頂いていくということが、やっぱり大きいですね。

教祖様ご自身にしても、それまでに信仰観っているのはね、当時の方

で持ち合わせておられましたし、信心熱心という意味においては「信心文さ」って周りがあだ名をつけるぐらいに、信心に対しては、神仏しんぶつを敬うという点において、信心熱心だったんだろうと思うんです。

でも、本当の意味で御道に出会い、てんちかねのかみ天地金乃神様に出会い、神様に教えて頂いた信心を歩ませて頂くというところ。そこはまあ、やはり求めておられたとは思ってますけどね。ほんとうに出会われたというものは、やっぱり苦しんでおられる時だったと思いますね。

七つの墓かぶつを築かされる中で、最後は自分の命もどうなるや分からんという中でね、その中で神様にお縋りをし、知らず知らずのご無礼に気付いてお詫わびを申し上げて、そして改まりを願って、教えて頂いた信心、

心ですよ。心を磨みがいていかれたんやうだと思います。

それは教祖様だけではないんですよ。お互い皆、信心のはじめというのがあります。信心のはじめ。お結界けっかいに座らせて頂いていて、皆さん、それぞれ信心のはじめがございます。多くの方が、信心をはじめるときに、どんな感じやったかなあっていうことを思うと、やっぱりみんな一生懸命いっしょうけんめいですよ。

今が苦しかったり、辛かったり、何とかして欲しいという気持ちです。タートしますから。だから、みんな信心のはじめというのは、神様に対して、それこそほれ込んで、足あし繁しげく通とって、よく神様に会いに行かれて、お参りして、ご祈念いのねんをして、よくお取次とりつぎを頂いて、お話を聴いて頂いて、

お話を聞かせて頂いて、聞いたことをまた守ろうと素直に聞いて、一生懸命、神様に向かっていく。

本人なりにそれまでの人生、一生懸命生きて来られてるわけですから、でも、自分の生き方では太刀打ちできなかつた、どうすることもできなかつた。だから、自分のやり方では無理やったということから、御神縁ごしんえんを頂いてますから、だから神様にお縋りし、金光大神様こんこうだいじんの教えにすぎり、教えて頂いたみ教えというものを大切にしながら、導いて頂きながら、教えて頂きながら、なかなかうまくできないところをまた教えて頂いて、手間暇てまひまかけて頂いて、だんだん、だんだんと信心けいこの稽古が進んで、おかげになっていくんですねえ。

最初はやっぱり苦しいですし、もう闇やみの中にいますから、その中から「こっちがいいよ、あっちがいいよ」って、さまよいながらも教えて頂いて、引っ張って頂いて、背中を押して頂いたりするというのは、やっぱりありがたいもんでねえ。真っ暗闇の中ってというのは、本当に怖いもんですけれど、「一寸先が闇」っていうのも本当ですもんね。

でもそんな中に、「こっちに行ったらいいよ」「っていうふうにして、神様が差し向けて下さった金光大神様が、神様の光をお提灯とほひのあかりとして持って、「こっちに行こうか、あっちに行こうか」言っていて、一緒に付いて、導いて下さる。今、その人が苦しんで、さまよっているところまで来て下さって、そこから、どうしたら神様の道に歩んで、どうしたら助かり、救いに

なっていくのかというところを、一緒になって考えて、導いて下さる。あくまでその人が信心せんといかんことです。成り代わることはできません。でも、その人に寄り添って、教えてあげて、育ててあげるといふことができるんです。

皆、一生懸命信心されますね。足繁く参るし、遠方の人やったら、メルやら、お取次やらでね、一生懸命お継りする。一言一句、漏もらさんように聞かしてもらったり、それをノートに書き留めたり。で、お参りする事が楽しみになったり、安心になったり。その道は本当に真っ直ぐなね。

「直ただい」ってという言葉が教祖様は仰おほいました。「直ただい」って直ただいのは、

真っ直ぐってという字を書いてね、「直い」。真っ直ぐな、素直な、正直な、ありのまんまの心で、神様に向かっていく。

神様にお熱を上げて、神様にほれ込んで、信心さして頂いていく。まあそうする中で、一生懸命ですから、^{おの}自ずから信心も上達していきますよねえ。

最初は何が何だか分からんところから、柏手かしわでの打ち方も分からんところから、神様の名前も作法も分からんところから、一つひとつ教えて頂いて、導いて頂いて、日々の暮らしの中で、どういふうにして神様と共に生きたらいいのかということ、ほんとに手取り足取りして教えて頂く。一生懸命ですから、素直に聞きますから、また神様に真っ直ぐで

すから、だからみんな一生懸命になる。そうすると、信心がだんだんと上達していきますね。

じゃあ上達していけば、おかげを頂くことができなかつた私という人間が、おかげを頂くことができるような私に変わっていくということですよ。そうすると、神様はもともと助けたい、おかげを授けてやりたい。その中で何とかして、先祖からの徳をかき集めてでも、何とかして導こうと思って、御神縁をお授け下さったわけですから、信心してくれたらありがたい、うれしいなあと思って、やっぱりおかげを授けて下さる。

氏子も助けてもらいたい。救って頂きたい。その気持ちはこれまでもあったでしょうけれど。分からん、どうしてええか分からん。どう生き

たらええか分からん、というところで、教えて頂いたところを大切に守って、一生懸命頑張って、信心して、精出してやっていくと、おかげを頂けるような器うつわを、自分自身が作れるようになってくる。そういう生き方ができるようになってくる。だんだんとね。

そしたら授けてあげたいおかげを、授けて頂きたいおかげを、少しずつ少しずつ頂くことが出来るし、授けてあげることが出来る。そしたらどうなるか？ そうなんですよ、だんだん道がついてくるんですよね。

もう、道にさまよって、森の中で、ほんとに暗い、真っ暗な中で、どこをどう行ったらええのんか。怖い中でねえ、ほんとに獣けものはうろうろして、いつ襲われるや分からんし。真っ暗やから、どこに歩いて行ったら、

いつ崖がけから落ちるやら、すっ転ぶやら分からんようなところで、そこに一緒に来て下さる。そして導いて下さる。これがどれほど安心なことかねえ。

たとえ迷うんでもね、一人で迷子になって、真っ暗な中におると、一緒いっしょになって迷子になって下さって、側にいて下さるだけでも、どれほど心強いことかねえ。そんな中で、さまよっているたましいを救おうとして、神様がご縁下さり、金光大神様が導いて下さり、今日こんにちがお互いあるんですけど。

でも最初の頃を見たら、やっぱりみんなそうして一生懸命するんですよ。で、おかげを頂けるような自分になっていく。器ができるようにな

っていく。そしたら、立ち行くおかげを頂いていく。あんだけ苦しかったけれども、だんだん道がついてきたなあ。まだまだおかげを頂かんといかんところはある。でも、ここまでおかげ頂いてきたなあ。一年前の自分と、今の自分とを比べてみて、引き算してみたら、一体この一年間で、どれ程おかげを頂けたやろうかということが分かる。

眠れなかったものが、少し眠れるようになってきた。外に行けなかったのが、行けるようになってきた。体が動かんかったのが、動けるようになってきた。勉強できなかったのが、できるようになってきた。仕事ができなかったのが、できるようになってきた。

振り返ったら、いろんなことができるようになってきた。あるいは、

しちやいかんことをしてしまってたことを、せんでも済むようになってきたとかね。みな、おかげが頂ける。

それが一年経ち、二年経ち、三年経ち……ってなってきたら、本当にもう最初の初めてお参りした頃、信心のはじめと、一番最初にね、神様に出会う前と、それから信心さして頂いてきた自分とを比べたら、全然違うはずですよ。それだけおかげを頂いて、立ち行くおかげを頂いてるなあ、ありがたいなあ……っていうふうになっていきますよね。

難儀なんぎが全部消えたわけじゃなくとも、日に日に立ち行くという、まあ神様と金光大神様とを杖つえにしなから、歩まして頂いたら、ここまでおかげ頂けたんやということが分かってくる。これ、おかげを頂いてるんで

す。

でもそうになると、どうなるかと言いましたらね、皆、だんだん大胆だいたんにな
ってきますよねえ、おかげを頂くとね。まあ、そこからその人の本性ほんじょうが
出てくるっちゃあ、そうなんかもしれません。

にっちもさっちもいかん時には、もうすが縋すがって、縋すがってなんですけど、
だんだんおかげ頂いてやっていくと、そこから自分流がもともとあった
んでしょうから、その自分流がまた復活してくるっていうことは、よ
くありますね。

そうすると、自分が、自分がっていう、まあそういう「我が」が出てくる

んですよねえ。信心するってというのは、我を放す、我情我欲を放して、
真まの道を知っていくと、おみち御道の信心とも言えるわけですけど。
最初の、信心の初めの頃はもう素直に必死で、そもそも自分ではやり
方がどうにも立ち行かんから、縋すがってるわけ、素直に聞くんです。

そやけど、ある程度おかげを頂いてくると、だんだん、だんだん自分
が楽になっていきますしね、道がついてくるし、何となく見えることも
ある。そうすると、その人のこれまでの生き方というものが、結構出て
くるんですよね。

苦しい時は、もう何でも「助けて」になるんですけど、「喉元過ぎたら」
ってという言葉がありますけど、だんだん大胆になってきて、その人のm、

もともと持っている難儀なところとどうものも、やっぱり出てくるんですよねえ。首をもたげてくる。で、そうすると、どうなるかと言ったら、信心が落ちてくるんですよね。

おかげを頂けるような、最初の、信心の初めのような、そんな信心ではなくって、だんだんと何となく分かってきて、こうしてああしてというふうになって、自分でもできるようになってきた。まあ結構なことなんですけどね。でも、信心させて頂いてるところから、だんだん口ではそう言いながらも、自分が信心しているように勘違いかんちがし始めるんですよ。そして、まあ身の程、身の丈を知らずに大胆になって、神様、こんみょうだいごう金光大神様の、気が付いたら上に立っている。

いや皆さん、「そんなつもりはないです」「みんな言うんですよ。でもね、やっぱりそうなんですよ。座ってたらよく見えるもんでねえ。でも、やっぱりそうなっていると、信心のはじめというのが抜け落ちてくるんでねえ。ちょっとずつ元もとに戻るんですよ。

そしたら、信心が後退するとね、おかげが頂けるような信心から、前みたいにおかげが頂けないような信心に、ちょっとずつ戻っていくんですよねえ。これまあ困ったもんですけれど、やっぱり、そういうことってあるなあと思います。

で、神様としてせっかく授けたおかげを、氏子うじこが落としてしまったりする。おかげがないっていうんじゃないんですよ。そんな人に限って、

「おかげが頂けない」って言うんですけど、いや、おかげを頂けないじゃない。授けたおかげを落として、今、手元にないだけなんです。おかげを授けてもらってないんじゃない。違うんです。おかげは授けたんです。授けたけれども、その授けたおかげを、気が付いたら信心のはじめを忘れて、大胆になって、神様の上に立って、傲慢ごうまんになって、素直じゃなくなって、正直じゃなくなって。つまり、信心のはじめを忘れちゃうんですよね。

そしたらおかげを頂けてた自分が、おかげを頂けないような自分に戻っていく。信心のはじめのような、おかげを頂けるような信心が、おかげを落としてしまうような信心に変わっていく。で、また難儀なんぎなことに

なる。せっかくおかげを頂く筋道を教えて頂いて、その時は一生懸命いっしょうけんめい、素直にできてたのに、だんだん、だんだんおかげを頂いていくと、信心が強くなるといかに、信心が弱くなってしまふ。

自分が歩まして頂いてきたのに、それを忘れてしまふんですから、まさに、自分で自分を忘れてしまふんですよね。これ、どうしようもないですわねえ。どうやったら自分がおかげを頂いてきたのかというところを、忘れてしまつてるといふことはこれ、自分で自分を忘れてしまつてゐるんですよ。

ではどうなるかって言うたら、前の自分に戻るしかないですわね。で、また難儀になってくる。じゃあ神様はどんな気持ちかと言ったら、「おか

げを授けるのも大変やのになあ」。金光大神様は、「おかげを頂く器を作らせるのは、ほんとに大変やねんけどなあ。でも、授けたおかげをやっぱり大事にできんかったなあ」っていうことになる。

神様も残念。氏子も残念。金光大神様も残念。残念なことになるんですよねえ。つまらんことになってしまふ。

だから、そういうことがよくあるから、だから教祖様は、「信心のはじめを忘れなよ」という短いご理解ではあるんですけども、ご自身も含めてやと思います、やっぱりこれを忘れんように。忘れてしまいそうになるのが人間なんだけれども、そないならんように、教えて下さってるなあと思いますね。これは、最初の数年だけの話やなくて、信心が長

くなればなるほど、油断しちゃうあいかんなあと思いますね。

おかげを頂けるような信心から、おかげを頂けないような信心に戻っていかんような生き方にね、そういう心にならんように。偉そうにならんように、謙虚けんこな心で、神様に真まっ直ちかぐで、神様にほれ込んで、神様に熱あつを上げて、実意じついに、丁寧ていねいに、心を込めて、お継つがりして、謙虚けんこに聞きかして頂たまく。聞きかして頂たまいたことを守まもっていらへ。

それが真まの信心しんですよ。真まを込こめていかんといかんのんですから。神様かみさまに対して真まっ直ちかぐに向むかかっていく。そういう真まというものが、だんだん、だんだん薄うすくなっちゃうんですよねえ。

形かたちだけではできてるようでも、真まがなくなってしまうてるんです。最

初の頃の方が、右も左も分からん、さまよってた時の方が、真がこもってる。真剣まけんみがある。でも、だんだんおかげを頂いて、楽になってきたら、そうすると真剣まけんみがだんだん抜けて、真がだんだん薄くなっていく。

難儀な話ですねえ、ほんとにね。でも、そういったことはほんっとに多いと思います。だからこそ、教祖様はこうして戒いまめて下さっている。教えて下さっている。

信心のはじめを忘れなよ。信心のはじめを忘れなければ、頂いたおかげを落とさないというだけじゃなくてね。それを続けてさえいたら、助けて頂いたところから、さらにその先のおかげというものを授けてあげ

るじやがでまゐるわけです。

信心っていうのは、もう伸のるか反そるかでね、維持つっていうのはないんですよ。上がってるか下がってるか、どっちかなんです。だから維持するためにも、歩いとかんといけんようなところがある。足を止めたら、後退さっていくんです、これね。

だから続いて毎日、日々の信心のお稽けい古こに取り組くまりて頂たいでらして、した分だけやっぱり進んでいきますよね。信心のはじめ、一生懸命神様に向かつてたところを忘れんように、お互い信心さしてもらって、神様から頂たいでるおかげをお返しせんように。あるいは、神様が「もっと授けたいのに、もうちょっと信心してくれたらなあ。信心してくれはった

らえんやけどなあ。残念やなあ」って、神様に思ってもらえるようなことが、そういう相済あひすまんようなことがないようにね。

その時できてた信心をもう一度、忘れんように。お互いにですけどね。

「信心のはじめを忘れなよ」っていう、その教祖様のご信心をお互いに、信心頂いているお互いですから、忘れんように心がけて、今日一日、今日一日、その時その時を、神様と共に、金光大神様こんこうだいじんにお祈り添え頂いて、ご理解頂いたものを大事にしながら、過こごさして頂きたいもんやなあと思えます。

今日は今日で、神様からまっさらな一日を頂いておりますから、今日

一日をよい一日に、神様にして頂けるようにお願いしながら、自らもよい一日にしていけるように、心がけを大事にされて頂きたいと思います。おかげは和賀心わがこころにあり。和らぎ喜び心やわ、その心を大切にしながら、今日も一日を大切に、また今日一日を丁寧ていねいに、どうぞお過ごしください。今日も信心のお稽古けいことして頂きましよう。

よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第十九話

令和三年一月十九日 朝の教話

令和五年二月二十日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
